
知識や技能を活用する力を育む中学校社会科学習指導

－「社会科カード」を取り入れたパフォーマンス課題を単元のまとめとして－

上田 剛

(児童生徒支援コース 14502002)

1 問題

(1) 中学校社会科における課題

中学校社会科は「暗記教科」であるというイメージは以前からある。その要因として、授業と評価方法に問題があると考えられる。授業では、教師が一方的に説明する指導が多く行われ、生徒は板書を写し取ることが中心となる。社会科の評価では、主にペーパーテストで見取るのが一般的であり、市川（2014）は、その評価問題の内容が「暗記でもできるような問題」になりがちであるため、生徒も「暗記することが求められる科目なのだ」と認識してしまっていると述べている。このように、評価のしかたも学習行動を方向づける大きな要因となり、社会科は「暗記教科」であることを強く印象づけていると思われる。そして、機械的な暗記による負の学習方略の採用が、学習項目間の繋がりを欠き、有意味性を感じにくくさせるために、学習者を社会科嫌いにするのである（進藤，2002）。

(2) 生徒の実態における課題

①全国「特定の課題に関する調査」（平成 19 年度 国立教育政策研究所）

複数の資料の中から必要な資料を選択し、情報を総合的に考察して、説明することが苦手であること、問題解決的な学習について「取り組みにくい」と感じていることが課題であることがわかった。普段の授業でも、課題を設けて調べたり考えたり、資料を活用したりといった経験が少ないと回答しており、学習のプロセスを意識していないと考えられる。

②群馬県「ぐんまの子どもの基礎・基本習得状況調査」（平成 25 年度 群馬県教育委員会）

平均正答率が、全体は 67% に対し、社会は 47% と全教科中最低であった。「〇〇（教科名）が好き」という問いに対し、全体は 72% に対し、社会は 63% であった。否定的な回答の多くが、理由として「覚えなくてはいけないことが多いから」と回答しており、「暗記科目」という意識が、学習意欲の低下につながっていると考えられる。具体的な問題では、各時代の特色や、時代の変換の様子をとらえることについて課題が見られた。

③置籍校「標準学力検査 CRT」（平成 27 年度 実施）

平成 27 年度 4 月に行われた標準学力検査 CRT では、「思考・判断・表現」の観点において全国比 100 に対して 94 と 6 ポイント、「技能」においては 88 と 12 ポイント下回っていた。また、領域別では「歴史」が全国比 100 に対して 89 と 11 ポイント下回っていた。設問を見ると、歴史の流れや特徴をとらえる問題が特に通過率が低いことがわかった。

(3) 中学校学習指導要領解説 社会科編

歴史的分野では、歴史について考察する力や説明する力を育てる「各時代の特色をとらえる学習」や「時代の転換をとらえる学習」を取り入れるなど、言語活動の充実にかかわる学習を積極的に計画・実施し、学習内容の工夫・改善を図ることが求められている。

2 本研究の手立て

以上の問題に対して、赤沢（2005）は、中学校社会科を「考える」「問題を解決する」教科としていくためには、生徒が身に付けた知識の操作をおこない表現せざるを得ないような学習・指導場面や、それと対応する評価課題の必要を述べている。つまり、学習課題と評価方法を見直していくことが、中学校社会科において必要である。

(1) 「逆向き設計」論にもとづくパフォーマンス課題作り

前述した課題の対応策として、リアルな文脈において、知識やスキルを総合して使いこなす「パフォーマンス課題」を取り入れることを試みた。また、西岡（2008）は、ウィギンズとマクタイが提唱する「逆向き設計」論を用いることで、質の高いパフォーマンス課題を設計し、カリキュラムに位置付けることができると述べている。身に付けた知識や技能を活用して、思考力・判断力・表現力を育てると共に、より妥当性・信頼性のある評価ができるであろう。

本実践では、単元のまとめとして、学習指導要領にある「時代の特色をとらえる学習」に取り組みさせるために、学習してきたことを活用するパフォーマンス課題を取り入れる。そこで、西岡が提案する単元の最後に総合的な課題を位置付ける「パーツ組み立て型」のパフォーマンス課題（図1）が適切であると考えた。課題解決のためには、知識や技能を活用することを見通した授業構成が必要となってくるため、各時間での時代の特色のポイントを、指導計画の中に「パフォーマンス課題のパーツ」として位置付けた。

(2) パーツを身に付ける手立て

① 「社会科カード」の作成

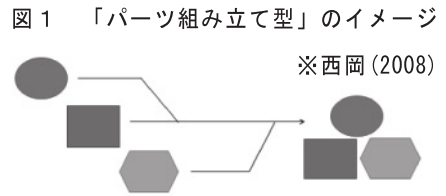
授業で学習した歴史的事象を「社会科カード」（図2）にまとめて、蓄積させていく。カードは「人物カード」「用語カード」「気候カード」などの数種類に分類し、カードの表には資料と名称を載せたものを準備する。裏面は宿題として生徒が記入する。記入内容は、最初は穴埋め方式だが、徐々に生徒に作成内容をゆだねられるように、フリースペースを増やすようにする。要点をまとめたり、イラストを使ったりと各自に工夫を凝らしてまとめさせる。記入した内容がそのまま、ポートフォリオ評価（「関心・意欲・態度」「技能」）にもつながる。

② 導入での「カード説明活動」

毎時間の授業の導入として、前時の復習となる説明活動を取り入れる。気候帯の特徴を表す写真カードや宿題の社会科カードについてグループのメンバーに説明する。他者に説明する活動は、情報が整理されたり、伝えるために表現を工夫したりして、理解を深める効果がある。本時で活用する知識の確認や協同の構えをつくることができ、本時のねらいへとつながる活動となる。

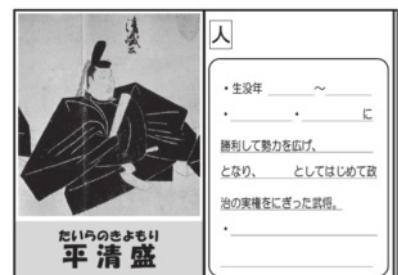
③ 「確認」を使った本時のまとめ

授業のねらいを具体化した「確認」を、授業の最後にまとめの活動として取り入れる。学習内容を要約する、自分の考えを述べるなどの言語活動を充実させることで、知識を定着させると共に、日常的に思考力・判断力・表現力の育成を図る。



※西岡(2008)

図2 「社会科カード」の例



(3) 言語活動の充実を図る協同学習

互恵的な関係の中でともに高め合う関係があつてこそ、思考力・判断力・表現力等を育成することができる（石川，2013）。そのために協同学習が有効な手立てである。

導入の場面において「カード説明活動」を取り入れることにより、理解を深めるだけでなく、友達の説明をしっかりと聞いたり、その説明に対して補足や質問をしたりすることにより、その後の授業全体に協同の雰囲気をもたせることが期待できる。パフォーマンス課題では、社会科カードを活用した協同学習を取り入れる。グループの協同による年表作りや相関図作りを通して、既習の内容を復習しながら整理させていく。また、ジグソー学習の要素を取り入れるなど、明確な役割を与えることで、より責任をもって主体的に学習に取り組むと考える。授業の最後には、課題について交流していく中で、クラス全体の協同により、課題の解決につながったことを実感させる。

(4) 地域教材の活用

学習指導要領において、通史学習の内容と関連した、身近な地域の歴史を授業で取り上げるよう述べられている。地域の歴史を学ぶことで、生徒の関心・意欲を高めるとともに、郷土への愛着と誇りを育てる。さらに、日本全体の歴史と地域の歴史の双方を関連付けることにより、多面的に歴史をとらえて、理解を深めることが期待できる。

3 本研究の仮説

「逆向き設計」論に基づく単元を総合するパフォーマンス課題を設定することで、身に付けた知識や技能を、思考力・判断力・表現力を発揮しながら、「活用する力」を育てることができるであろう。また、社会科の学習観の転換や意欲の向上が期待できる。

4 授業実践

本実践は、平成 27 年度に H 中学校 1 年生 2 クラスの計 50 名を対象として実施した。

表 1 パフォーマンス課題の実践計画

	6月	9月	10月	11月
単元	世界各地の人々の生活と環境	古代までの日本 (前半)	古代までの日本	中世の日本
課題	雨温図カードが、どこの都市のものかを説明しよう。	地域の古墳から、古代の群馬が先進的な地域であったことを説明しよう。	歴史カードで年表を作り、古代とはどんな時代であったかを説明しよう。	相関図を使って、新田義貞がなぜ「歴史に名高い」のかを説明しよう。

図 4 社会科カードによる年表作り

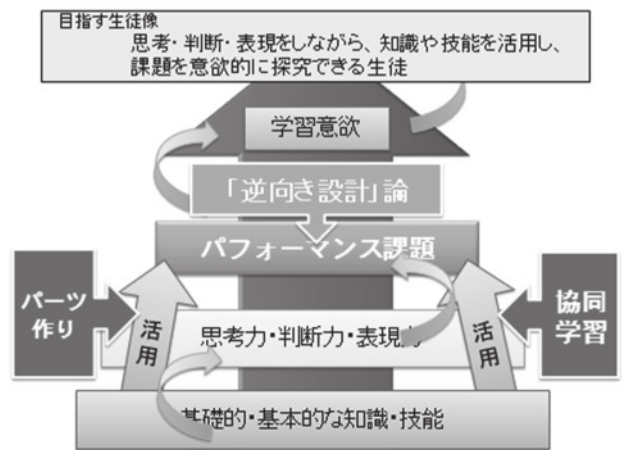
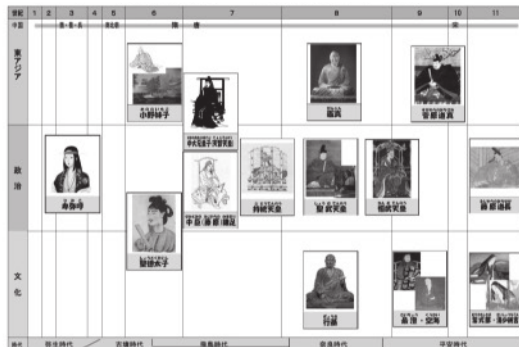


図 3 研究構想図

授業実践では、「個人→グループ→全体」の過程を協同で取り寄せた。最後には必ず個人に戻して、一人一人に説明をまとめさせた。また、社会科カードを課題解決に向けての思考ツール

として活用した。協同学習の中で、お互いの考えを表現したり共有したりすることができ、話し合いの見える化へもつなげた。10月の課題では、「政治」「文化」「東アジア」の3つの視点を設けた年表に、協同でカードをまとめる活動を通して、学習内容の整理と課題解決を促した（図4）。

単元の実践例として、11月のパフォーマンス課題の実践の流れを以下の表2にまとめる。

表2 11月のパフォーマンス課題の実践計画

単元名・主な学習内容	パーツ作り
歴史 第3章 中世の日本	
1節 武士の台頭と鎌倉幕府 ・武士の台頭と源平の争乱 ・武家政権の成立とその特徴	○カードの説明活動による導入 ○「確認」による毎時のまとめ ○歴史カード作り
2節 東アジア世界とのかかわりと社会の変動 ・鎌倉幕府の滅亡と南北朝の動乱 ・室町幕府の成立	○カードを使った関連図作り 作り方の導入+関連図Ⅰ～Ⅳ
パフォーマンス課題④ 歴史「中世の日本」 関連図を使って、新田義貞がなぜ「歴史に名高い」のかを説明しよう。	

図5 社会科カードによる関連図作り

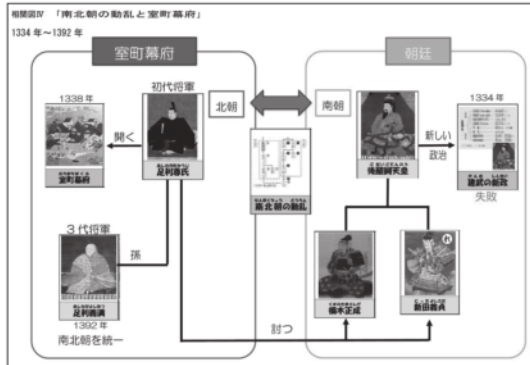


図5の関連図作りでは、最初に書き方を提示して、徐々にワークシートの支援を減らし難易度を上げていくようにした。このように年表や関連図の台紙も思考ツールの一つであり、単元のねらいに応じてそれぞれ形式を工夫した。

5 検証

(1) アンケート結果から

社会科における学習観などについて、4月と11月の2回にわたり、アンケート調査を実施した。分析の結果、全ての項目で望ましい変化が見られた。社会科に取り組む基本的な姿勢や学習方略を学んだといえる。また、11月のアンケートでは、パフォーマンス課題に取り組んだことによる感想と社会科へのイメージの変化についても調査した。「学習内容を整理できた」(16名)、「協力して取り組む良さを感じた」(15名)、「社会科が楽しくなった、好きになった」(9名)などといった肯定的な感想を全ての生徒が記述した。また、93%の生徒が、パフォーマンス課題により社会科に対するイメージが変化したと答えた。その理由には、「単純な暗記よりも、関連・表・説明などを使うと覚えやすいから」(16名)、「覚えたことをもとに関連・活用することで解決できたから」(13名)など、協同学習や学習方略の有効性を実感している記述が多く見られた。

(2) パフォーマンス課題の結果から

表3を見ると、6月から10月のパフォーマンス課題において、A評価の生徒が高まり続けたことがわかる。11月の課題は、図6のように4つの関連図を作成して歴史的事象を読み取り、最終的にはそれらを持ち寄って「中世の特色」というさらに一段階上位の概念でまとめる難易度の高いものである。通常のパフォーマンス課題のさらに上のレベルを目指した。にもかかわらず、C評価の生徒が0人になったことは成果の表れである(表4)。

(3) 各種調査との比較

実践終了後、基礎・基本の定着や知識や技能を活用する力について調査するために、「1問題」で述べた調査と同様の問題に取り組みせて、全国・全県の平均正答率と比較した。

① 全国「特定の課題に関する調査」

表3 パフォーマンス課題の評価の変容

月	6月	9月	10月
課題	雨温図	古代の群馬の先進性	古代の特色
A	24人 (51.1%)	30人 (68.2%)	33人 (75.0%)
B	14人 (29.8%)	9人 (20.5%)	8人 (18.2%)
C	9人 (19.1%)	5人 (11.4%)	3人 (7.3%)

※合計数が違うのは欠席者がいたためである。

図6 11月のパフォーマンス課題

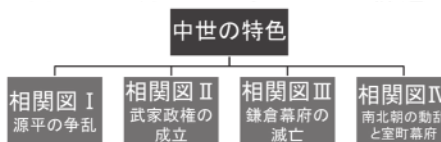


表4 11月の評価

月	11月
課題	新田義貞 (中世の特色)
A	9人 (20.0%)
B	36人 (80.0%)
C	0人 (0%)

問題解決的な学習の実現状況を把握するため、様々な資料を活用し、調べ、考え、判断し、自分の考えを適切に表現する力をみる記述式の問題に取り組みさせた。全ての設問において、全国平均を上回ることができた(図7)。特に設問2については、全国と比べて約30%上回っており、資料をもとに時代の特色を見だし、表現する力が定着した。

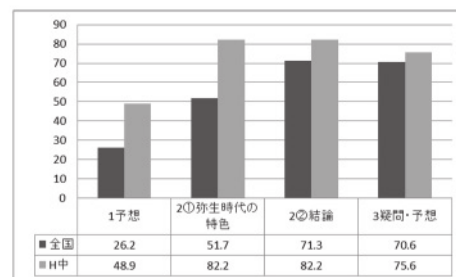


図7 特定の課題に関する調査

②群馬県「ぐんまの子どもの基礎・基本習得状況調査」

基礎的・基本的な知識や、各時代の特色や時代の転換の様子をとらえる問題に取り組みさせた。7つの設問のうち、6つにおいて県平均を上回った(図8)。特に設問7については、課題となっている時代の特色や転換の様子をとらえる記述式の設問であり、倍近い正答率を得ることができたのは、単元を総合するパフォーマンス課題に取り組んだ成果の表れである。

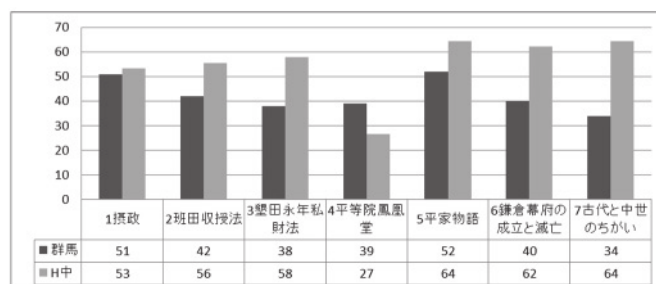


図8 ぐんまの子どもの基礎・基本習得状況調査

6 考察

①学習観の変容

パフォーマンス課題に取り組ませたことにより、学習観の変容を生徒自身が実感することができたことは大きな成果である。アンケートからも、多くの生徒が、社会科は暗記した知識を再生するだけでなく、知識や技能を活用する必要があることに気付いた。その結果、協同で課題を解決するおもしろさを感じて、社会科への意欲の向上にもつながった。

②「学び方」を学ぶ→他教科・他領域の転移へ

本研究では、パフォーマンス課題において、最終的に「説明する」活動に取り組ませた。説明をするために知識を使いこなすことで、より理解を深めることができた。また、協同で取り組むことにより、さらに効果をあげることができた。このような活動を積み重ねて、生徒の活用する力は確実に高まった。今までは多くの生徒が、単純な暗記や練習量に頼った学習法であった。しかし、課題解決において用いた説明活動や、年表・相関図といった学習内容を関連させて覚える方がより効果的であることに気付いた。テスト前には友達同士で説明し合ったり、自主学習で相関図にまとめたりする生徒が見られた。以上のように、授業を通じて身に付けた「学び方」は、他教科・他領域へも転移が期待できる。

③長期的ルーブリックの確立

本研究では、最終的な課題はレベルが他と異なるため、統一的な長期的ルーブリックとはならなかった。これは、10月の時点でB基準以上が90%以上となったため、生徒の実態に合わせて11月にはさらに高度な課題設定へと変更したためである。本年度の実践をふまえることで、年間を見通した育てたい力が明確になり、来年度には長期的ルーブリックが確立できる。そして、各課題のルーブリックにも系統性が生まれ、学習の成果を長期的・短期的に把握することが可能となる。

【主要参考文献】

- 西岡加名恵編著(2008)『『逆引き設計』で確かな学力を保障する』明治図書
 佐藤浩一編著(2013)『学習の支援と教育評価—理論と実践の協同—』北大路書房